

制服としての看護服の変遷と現代における看護服のデザインの違いが
看護師および患者に与える心理的影響
Changes in nurse clothes as uniforms and the psychological effects of differences
in the design of nurse clothes on nurses and patients

庄山 茂子^{*1+}, 柄原 裕^{*2+}, 窪田 恵子^{*3+}, 青木 久恵^{*3+}
Shigeko Shoyama^{*1+}, Yutaka Tochihara^{*2+}, Keiko Kubota³⁺ and Hisae Aoki^{*3+}

*1 長崎県立大学国際情報学部 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

Faculty of Global Communication, University of Nagasaki,
1-1-1 Manabino, Nagayo-cho, Nishisonogi-gun, Nagasaki, Japan

*2 九州大学大学院 芸術工学研究院

Faculty of Design, Kyushu University

*3 福岡女学院看護大学看護学部

School of Nursing, Fukuoka Jo Gakuin Nursing College

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : Recently, there are various styles of clothing for nurses, which include one-piece, upper wear and long pants, and upper wear and skirts. In addition, the clothes have various colors as well as white, and can be patterned. Various reasons such as functional improvement and avoidance of giving patients intimidated and negative feelings on seeing a white coat have led to these changes. Thus, 304 female nurses were examined to clarify what impression they had of 6 styles of nurse' clothing. Clothing which patients considered favorable and nurses wished to wear comprised long pants and a non-patterned white coat. Clothing which patients did not consider favorable and nurses did not wish to wear comprised a floral-printed one-piece with a white background. A non-patterned white coat was highly evaluated from the points of "sense of responsibility" and "beauty". The floral-printed style was highly evaluated from the points of "thoughtfulness" and "individuality". Long pants were highly evaluated from the perspective of "function".

はじめに

近代看護は、19世紀後半にナイチンゲールによって確立された。日本においては、1885年に看護婦養成の教育がはじまっている。当時は筒袖の上着と袴のような長いスカートに草履というスタイルであった。その後、1920年代には詰襟のワンピーススタイルが採用された。1940年頃から欧州の看護婦の白衣が非常に活動的であることをヒントに改良され、折り衿でヒダの少ない短い

*1) shoyama@sun.ac.jp

スカートへとスタイルが変化した [1,2]。現在では、ワンピースに加え、パンツと上衣を組み合わせるなど様々なスタイルの看護服が着用されている。しかも白だけでなく様々な色や柄の施されたものが見受けられる。このような看護服の変化には、機能性の向上、男性看護師の増加、現代ファッションスタイルの個性化、白衣が威圧感や恐怖感を増幅させることが問題視されるようになったことなど、様々な背景が考えられる。

これまで、看護服については衛生面からの研究 [3,4] や白衣高血圧症に着目した研究 [5,6] は数多くなされてきたが、看護服の変遷について、日常着の洋装化や学校や企業の制服制定等との関連からみた研究は見受けられない。一方、被服は、自己概念が大きく関わっており、着用者の気分や感情、動作に影響を与えている。沼田と中川 [7] は、衣服の色彩が着用者の感情に及ぼす効果は非常に大きく、色によって特有の感情を生起することを明らかにし、庄山らは [8]、リクルートスーツのシャツの色の違いにより異なる服装メッセージを伝達することを報告している。しかし、これまで看護服を対象に研究はなされていない。看護服は、看護師の印象形成に影響を与えているだけでなく、色によって着用者に特有の感情を生起すると考えられることから、患者と看護師の双方から看護服に対する心理的研究が求められる。

本研究の構成

本研究は、文献研究、アンケート調査、検証実験を平成 22 年 10 月から平成 25 年 3 月までの 2 年半にて行う。制服としての看護服の歴史的変遷を社会の変化や文化的背景から文献研究を行う。特に、日常着が和服から洋服へと洋装化し、学校や企業において制服が制定される中で看護服がどのような変遷を辿ってきたのか明らかにする。また、全国の病院を対象にどのようなデザインの看護服が採用され、看護服に対してどのような配慮がなされているか実態調査を行う。さらに、異なるデザインの看護服に対し、看護師自身がどのような印象を抱くか明らかにするアンケート調査を行う。文献研究ならびにアンケート調査を基に、色・柄・スタイルの違いに着目し、看護師ならびに患者（観察者）の心理的視点から検証実験を行い、今後の看護服に求められるデザインを服飾文化の視点から考察する。

22 年度の経過報告

(1) 女性用看護服に関する全国調査

【目的】近年、女性用看護服のスタイルは、ワンピース、上着とパンツ、上着とスカートを組み合わせたスタイルなど様々である。また、看護服の色や柄も多様化している。そこで、表現メディアとしての看護服に着目し、全国の病院を対象にどのようなデザインの看護服が採用されているのか、また、看護服に対してどのような配慮がなされているか明らかにすることを目的に実態調査を実施した。

【方法】(1) 調査概要 対象：全国の臨床研修病院 804 病院、調査時期：2011 年 1 月～2 月、調査方法：郵送による質問紙調査、

- (2) 調査内容：・病院について（地域、看護師数、ベット数、診療科等）
- ・看護服に対する病院（着せる）の視点 6 項目
 - ・看護服に対する患者（見る）の視点 4 項目
 - ・看護服に対する看護師（着る）の視点 3 項目

- ・看護服に対する将来 2項目
- ・現在着用されている看護服について (※23年度に分析し、結果をまとめる。)

(2) 看護師による異なるデザインの看護服に対するイメージ評価

【目的】近年、看護服として着用されている上衣とパンツ、上衣とスカート、ワンピースの3スタイルについて、白衣と白地に花柄が施された2種の計6スタイルの看護服に対し、看護師自身がどのような印象を抱くか明らかにすることを目的に調査した。

【方法】(1) 調査概要 1) 試料作成：パンツ、スカート、ワンピースの3スタイルに白地に柄無しと花柄有りの2種、合計6サンプル、花柄は、Adobe Illustrator CS3により作成し、UP Series for Windows Ver3.0により、無着色の看護服のデザイン画に貼り付けた(図1)。各試料のサイズは縦16.0cm×横4.5cmとした。2) 対象者：福岡県の女性看護師304名(平均年齢31.8歳、SD10.6歳)、3) 調査方法：配票留置法による質問紙調査、(2) 調査内容：患者の立場で好ましい、好ましくない看護服の1位、看護する立場で着用したい、着用したくない看護服の1位、各サンプルのイメージ評価(3) 分析方法：単純集計、t検定、一元配置分散分析、因子分析

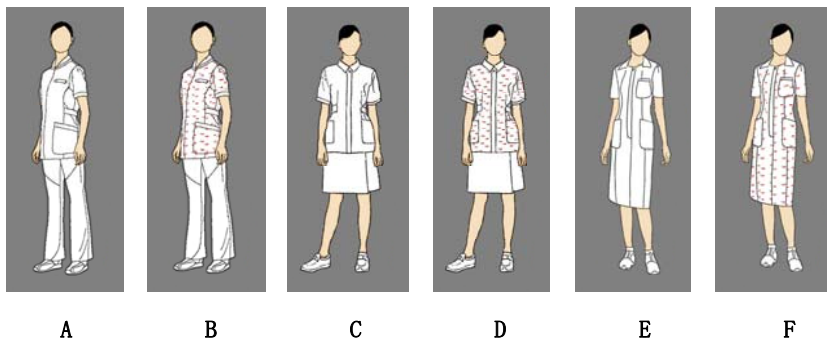


図1 6スタイルの看護服 Fig.1 6 styles of nurse' clothing

【結果および考察】患者の立場として好ましい看護服、看護する立場として着たい看護服は、パンツスタイルで柄なしの白衣であった。患者の立場として好ましくない看護服、看護する立場として着たくない看護服は、ワンピーススタイルで白地に花柄であった(図2-5)。看護服のイメージ構造を明らかにするために因子分析を行った結果、「責任感」、「思いやり」、「美しさ」、「個性」、「機能性」の5因子が得られた。スタイル別に平均因子得点を求め、一元配置分散分析により各因子についてスタイル間にどのような違いが見られるか分析した。その結果、「責任感」、「美しさ」については柄なしの白衣、「思いやり」、「個性」については花柄のスタイル、「機能性」については、柄の有り無しともパンツスタイルの因子得点が高かった。「責任感」、「思いやり」、「美しさ」、「個性」、「機能性」は、看護服に求められる要素であることから、今後これらの要素をすべて具備するデザインの検討が必要である。

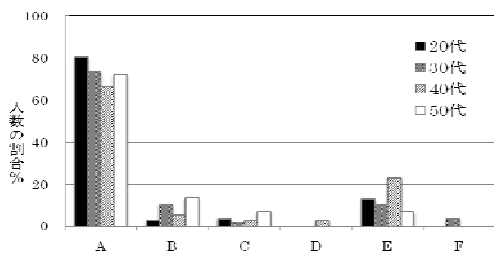


図2 患者が好ましいと考える服 Fig.2 Clothing patients considered favorable

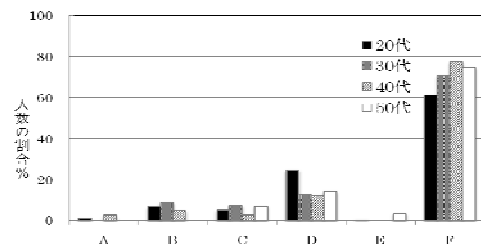


図3 患者が好ましくないと考える服 Fig.3 Clothing patients considered unfavorable

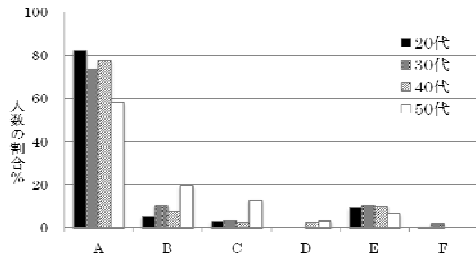


図4 看護師が着たい服
Fig.4 Clothing nurses wished to wear

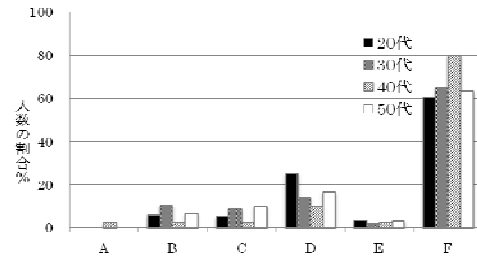


図5 看護師が着たくない服
Fig.5 Clothing nurses did not wish to wear

おわりに

平成22年度は、看護服の実態を明らかにすることを目的に全国の病院を対象に看護服の実態調査を実施した。さらに異なるデザインの看護服に対するイメージ評価の調査を実施した。次年度は継続して2つの調査の詳細な分析を行う。さらに、制服としての看護服の歴史の変遷を社会の変化や文化的背景から明らかにする文献研究と2つの調査結果をふまえて、看護師ならびに患者の心理的視点からフィールド調査(24年度実施予定の検証実験)の検討を行う。

謝辞

全国調査にご協力いただきました各病院の看護部統括責任者の皆様、イメージ評価の調査にご協力をいただきました福岡県内の看護師の皆様へ感謝申し上げます。

文献

1. 大阪大学医学部附属病院：「阪大病院看護職員 白衣の変遷」
<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/hp-nurse/info/graffiti-uniform.html> (2011)
2. 日本赤十字看護大学 看護歴史研究室：「日本赤十字社看護教育の歴史～明治から、大正、昭和、そして平成～」
http://www.redcross-history.org/museum/2007/03/post_2.html (2011)
3. 船津美智子、渡辺健治：「院内感染と病院用アパレルの衛生(第1報)」*日本衣服学会誌*, Vol.41, No.1, pp.23-34 (1997)
4. 河地 洋子、佐々木 美津子、石本 律子他：「抗菌素材使用のナースウェア製作に関する研究」*日本服飾学会誌* Vol.16, pp.119-131 (1997)
5. 平泉 武志, 熊野 宏昭, 宗像 正徳 他：「高血圧症患者における白衣現象に対する自律神経機能、心理・行動特性の関わり」*東北医学雑誌* Vol.112, No.2, pp.172-174(2001)
6. 大西 美也子, 三宅 良明, 佐藤 和雄：「妊娠時高血圧病態における白衣高血圧の頻度について」*日本妊娠中毒症学会雑誌* Vol.1, pp.81-82, (1993)
7. 沼田 里衣, 中川 早苗：「衣服の色彩が着用者の感情に及ぼす効果について」*日本色彩学会誌* Vol.24, pp.110-111, (2000)
8. 庄山 茂子, 浦川 理加, 江田 雅美：「リクルートスーツのシャツの色が印象形成に及ぼす影響」*デザイン学研究* Vol.50, No.6, pp.87-94, (2004)